

女難の男の

玉責め暮らし



玉子王子 著

## 一章 カジトの生まれつきの女難

とある一軒家。

寝室の一つに一〇歳ほどの少年一人と、二〇代前半を頭に女三人並んで布団に入っていた。

女の一人が目を開ける。

あくびをしつつ体を起こす。寝起きで弛んだ目つきをしているが、長女らしくどこか真面目そうな顔立ちをしていた。丸出しの女の丘はバレーボール二つといえるほど巨大で張りのいい物だった。ちら、と横を見る。

「うふふ、カジト一、寝てるのかなー？」

「寝てる寝てる」

「可愛い寝顔ねー」

「うふふ、起きてる時の生意気な態度からは考えられないわ」

残りの二人も体を起こす。シャツの者もいれば、柔らかいブラの者もいる。みな、一様に巨乳である。

目くばせし合い、カジトの布団をゆっくり持ち上げ、中を覗き込む。

顔を緩める巨乳長女。

「おほお、お元気、しっかり銃刀法違反」

「弟が元気でうれしいわね」

「っていうか、最近急激に育ってるよね、カジトちゃんのココ」

布団を剥がされる弟。死んだように眠っている。

そのパンツ、下から持ち上げられているのは若いから当然といえるが、その持ち上げられ方は並ではなかった。大人でも大物と呼ばれるだろう太いモノがパンツを押し上げ、上からはもちろん、長さが並ではないので横からも中が余裕で覗ける状態だ。無毛なのが信じられない巨大すぎるモノである。

そのパンツを引っ張られると、さすがに寝つきのいい子供でも目を覚ます。やや吊り上がった目をしたいかにもクソガキっぽい顔つき。その目を普段以上に吊り上げる。

「あ、何すんだよ！」

「もうちょっと寝てなよ」

「ここだけ起きててさ」

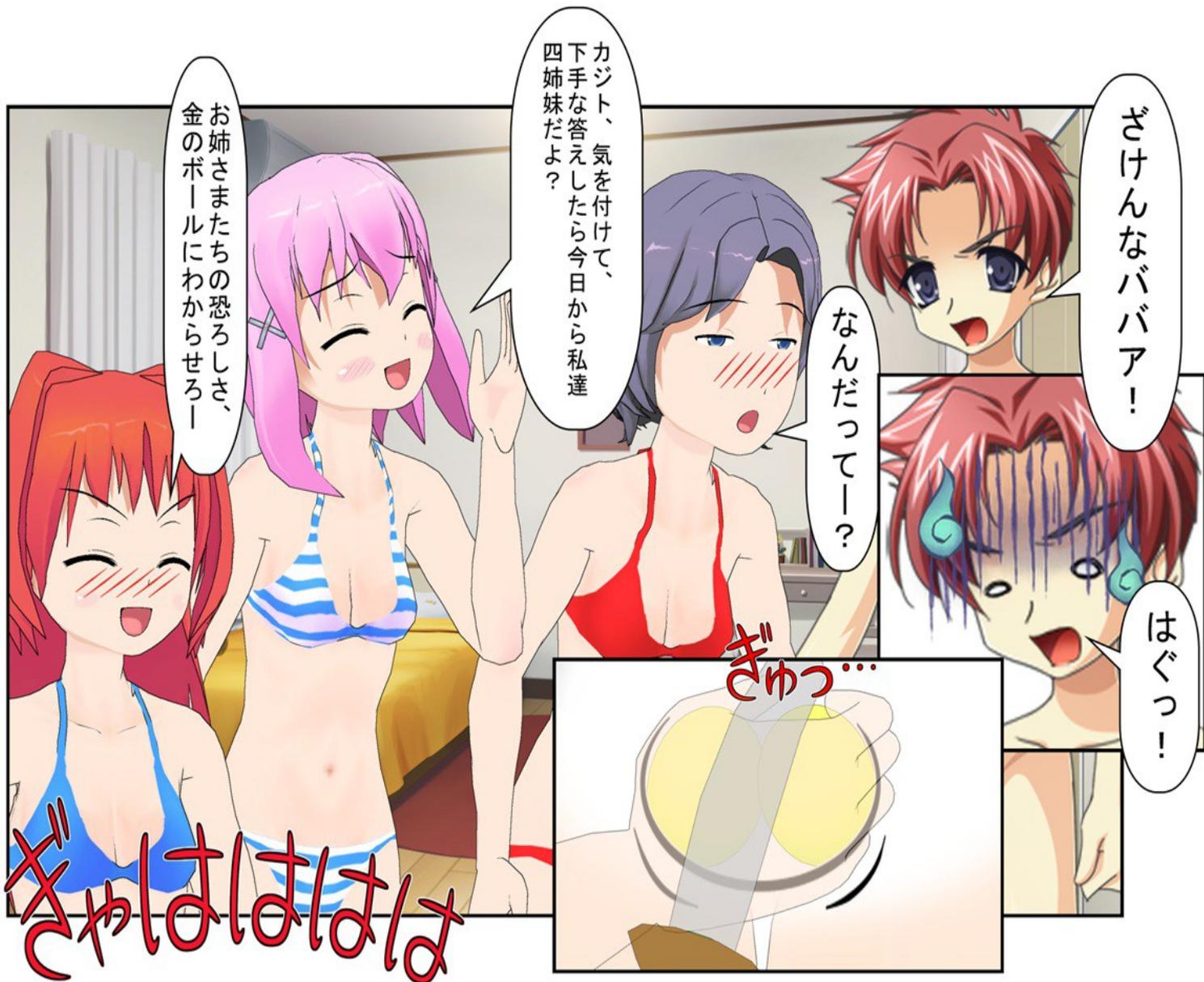
「ざけんなババア！ はぐっ！」

パンツをいったん前に引っ張って下ろした姉が、弟の自分たちにはない臓器二つをキュッと握る。華奢な体に似合わない鶏卵サイズの大物だが、姉は握り慣れている。

「なんだってー？」

「カジト、気を付けて、下手な答えしたら今日から私達四姉妹だよ？」

「ババアは許せないわー、お姉ちゃんたちはまだしも、私はまだ若いんだから。お仕置にキ〇タマ潰しちゃえー、お姉さまたちの恐ろしさ、金のボールにわからせろー」



「私らはまだしも？ あんたも大して変わらないでしょうが。そういう子は……」

「え、あっ」

垂れ目でどこかおっとりした感じの三女の股間に手を伸ばす長女。

下着の中に手を入れ、当然平らな股間を掌で押さえる。

「カジトと同じようにお仕置きよー」

言いつつ、ニギニギと手を握り、開くがもちろん何も手の中に入る物などない。身をよじりつつ、三女も同じく姉に手を伸ばす。

「きゃー、タマタマ潰されるー。こうなりゃ、私も反撃だ！」

「はううう、股間握りはやめてくれー」

股間を手で覆いあう姉妹、握り、開く。もちろん何もない。

やり取りしつつ、ちらちらと弟の方を見る。弟は、自分の握られた股間と、姉二人の握る物のない股間の構造的な強さの違いを感じずにはいられない。自分の弱点をがっしりと握られた状態では猶更強く感じずにはいられず、目を泳がせつつも姉二人の股間から目を離せない。

いや、放せる。きゅっきゅと力を籠められれば、姉二人の頑丈な股間観察などしている余裕はなく

なる。とはいえ、別に握られている場所を見ることもない。見ても仕方ないし、見るのも怖い。だから目を泳がせるだけだ。

「ほう、ほう」

丸出しの一物は腕並に見えた。朝立ちのままにギンギンと痙攣するモノと、青ざめる弟の顔を交互に見ながらにんまりする次女。

「あはは、カジトちゃん凄い汗だねー、キ○タマ握りそんなにつらい？ 男の子は大変だねー、それに比べて、お姉ちゃんたちはなんともなし。同じことやりあってるけど、女の子だからね」

クリッとした小動物っぽい目の、要領のよさそうな次女が布団の上にしゃがんでいる。と、弟の目が自分のパンツを見たのに気づく。

「あは、もちろんお姉ちゃんも同じことされても平気だよー。何度見ても、お姉ちゃんのここには…」

くい、と慣れた手つきでパンツの前をずらし、大人の女の割れ目を見せ付ける。みずみずしい、若いピンクの花びらを。

「ほれほれ、無いでしょ？ 金の玉。女はみんな、玉がな一い。だからお股が無敵なの一」

「そうだぞ一、ほれほれ、お姉ちゃんのもみなさい」

「こっちも、ほら、証拠だよ一、キンキンがない、無敵であるという証拠」

握りあいをやめ、次々とパンツをずらす若い女たち。その割れ目をつい見えてしまいつつ、顔を赤らめる弟。

「な、何が無敵だよ、玉無しババアが……はぐああああ！」

ぎゅうううううう、と長女が弟を握りしめる。弟の、自分たちにはない臓器を握りしめる。

「誰がババアじゃー、おいー、おいー」

のたうつ弟を半眼で見る長女。

青ざめ、汗を噴出させるカジト。

「く、くふうううう」

——キ○タマがっ、キ○タマがっ！ こ、このクソマ○コども……三人もいて、誰もこの痛みも苦しみも、全然分からねえ、一生わからねえんだ、俺だけの苦しみ、男だけの痛み……

「は一い、去勢手術けって一い、玉潰し去勢けって一い」

長女がつまらなそうに言うと、次女が眉を八の字にして身をよじる。

「カジトかわいそ一、お姉ちゃんキ○タマ潰しのプロだからね一」

「あはは、大丈夫大丈夫、お姉ちゃんたち、薬一杯持ってるから」

ナノメカ入りの薬で、手足が吹っ飛んでもすぐに再生できる世界である。

睾丸ぐらいなら秒で治せる。それは圧倒的にありがたい救いでもあるが、一方で「治せるから」と割と軽い理由でガチ潰しにくる女たちを生み出しもする。

男なら自分がやられることを恐れねばならないが、女の場合それはないのだ。

とはいえ、姉三人もさすがに年の離れた弟の睾丸を治るからと実際に潰しはしない。

しないが、さほどの遠慮なく握り締めはする。ナノメカ入りの薬がない世界なら、万一を考えて軽くしか握れないところだが、万一の場合治るならばギリギリまで責められる。

「あおおおおお！」

ぎゅむううううううう、と姉の華奢な手が、それでも弟の手よりかなり大きい手が弟の絶対急所を遠慮なく握りしめる。

握る姉も、見ている姉たちも満面の笑みである。

笑ながら、囃し立てる。

「どうしたどうしたゴールドー」

「ほーれほれほれゴールドー」

「ほーれほれほれレトリバー」

「レトリバー？」

「ほら、ゴールデンレトリバーって犬いるじゃん」

「かー、クツソ下らねえ」

「カジトは面白いと思うよね？」

「く、クツつまんねえじゃねえか……あっ！ ちょ、面白い面白い面白いいイイイ！」

「ぎゃははは！ 女の子にキ〇タマ握られたら、何でも言う事聞かないとだめよ。いつも言ってるでしょ？」

「く、くふううう」

——ほんと、こいつら毎日のようにこういうことしてくるからな。クソババアどもが……これだから女は大嫌いなんだよ。

「はうっ」

ビク、と震えるカジト。

巨棒。

反り立つそれに、三女ががベローンと舌を這わせていた。

「うふふ、タマタマ潰しだけじゃかわいそうだから、今日も気持ちよくしてあげるね？」

「や、やめろよ変態……うぶっ」

横から、次女がシャツをあげて巨乳で弟の顔を挟み込む。

「ほーれほれ、オッパイだぞー」

「すぐ出ないようにキンキンかわいがってあげるね」

「やめ……おぶおおおお」

巨乳に顔をうずめられ、ベロンベロンと巨棒を舐め上げられ、睾丸を握り潰される。

三人の姉に毎日のようにこうやって男の天国と地獄を味わわされれば、女への態度が歪んできても仕方ない話だろう。

「お、キ〇タマ上がってきた。握り潰しでリセットできないかな？」

「ははぐううう！」

「きゃ、出だ出た！」

「すごい出てる！」

「昨日もあんだけ出させたのね」

「そりゃこんだけ立派なおキンキンだもん」

「っていうか、キ〇タマ握り潰されながら出す様な事何度もしたら、この子ドMになっちゃうんじゃないかね？」

「それのなにか問題？」

「問題っていうか、そうなったらうれしいねーって、話し」

笑いあう三姉妹。

カジトは、仰向けに寝ている。頭を長女の巨乳に埋もれさせ、両手は左右の姉の巨乳に挟まれている。

そして出し終わってもまだギン立ちの若い巨棒を姉たちの手で優しく撫でまわされ、同時にその下の巨玉は女らしい遠慮のなさで揉み解されていた。

足や胴体は姉たちの足で抑え込まれ、身動き取れない。

「ふ、ふぐううう！ もう許してっ」

「あー、可愛い可愛い」

「ほんのちょっと前には、このデカブツがこんな親指ぐらいの大きさだったなんて信じられないよねえ」

「あと何年かで、力じゃかなわなくなっちゃうんだろうなあ」

「今でも一対一じゃかなわないかも、男の子だもんね？」

もちろんそんなわけもないが、可愛い弟を持ち上げてやる姉。女にとって、「自分が弱い」などという話はどうでもいい話しなのだった、いくらでも譲ってやれる。

弟の力と睾丸を持ち上げる姉。モミモミと楕円形の肉ボールを揉む。

「でもね、どんなに強くなっても、お姉ちゃんたちは知ってるからね？ 強いカジトの、唯一弱い所がどこか」

「あらあ？ どのなのカジト？ どのボールが弱いなの？」

「ねえねえ、どこが弱いなの？ どのキンキン弱いなの？」

「う、うるせえババア……はぐっ！ ああああ！ そ、そこです、そこですううう！」



——く、くそ……ババアどもっ。

のたうちつつ、ちらちらと周りを見る。姉たちの、まったくいらな股間を。

相手が兄だというなら、隙をついて同じ仕返しも可能。だが姉となれば、打つ手はない。

なぜなら、姉の股間には、睾丸がないからだ。

「きゃはは！ 動ける状態なら男の人のほうがまあ体は頑丈って言えるけど、動けなくなったら明らかに弱いよね。だってキ○タマ狙われちゃうから！」

「まあ男同士なら狙わないのかもしれないけど、自分も狙われたくないから」

「でも、私達女の子は股間への報復は気にする必要ないから、余裕でこうやってー」

「あおおおおおお！」

「睾丸ばっかり狙えまーす！ コーガン！」

朝から寝室で半裸の女たちに男性器を揉み解され、笑い声の中で身動き取れずに抑え込まれ続ける、これが石垣梶人にとっての日常の光景だった。

これが物心ついた頃からの習慣なのだから女嫌いになっても仕方ないといえるだろう。

体験版終わり

この後カジトは学校で女兒たちによる金責めという女難の嵐に見舞われます

続きは製品版でぜひお楽しみください